

ダンテ『水陸論』——アリストテレス受容の一例としての

浦 一章

本稿は、わが国では『水陸論』の表題が慣用的にあてられている、ダンテ・アリギエーリの論考の全訳および解題・訳註である。テキストとしては、Dante Alighieri, *Questio de aqua et terra*, a cura di F. Mazzoni, in Dante Alighieri, *Opere minori*, t.II, Milano-Napoli, Ricciardi, 1979, pp.691-880 を用い、Dante Alighieri, *De situ et forma aque et terre*, a cura di G. Padoan, Firenze, Le Monnier, 1968を適宜参照した。ラテン語原典からの邦訳としては、筆者(かつ訳者)の知るかぎり、わが国初の試みであろう(*)。

『水陸論』がダンテの真作かどうかをめぐって、かつては議論が展開された。その原因は、大きく分けるならば、(ア)論考の伝承に関わる外的状況と、(イ)論考の内容にあったと言ってよかろう。『水陸論』は、ようやく1508年になって初めて公にされた。聖アウグスティヌス会修道士ジョヴァンニ・ベネデット・モンチェッティ(Giovanni Benedetto Moncetti)⁽¹⁾が、ダンテの死後約200年ばかり埋もれていた写本を発掘し、これを活字印刷することによって世に知らしめたのである。しかしながら、この論考には、ダンテの初期の註釈者や伝記作者が誰も言及していないこと。さらには、モンチェッティが刊行に際して利用したもの以外には、論考の別の写本は伝わっておらず、モンチェッティが利用したものも論考の刊行後に散逸してしまったこと。また、モンチェッティが利用した写本を見たと証言する者もないこと。加えて、モンチェッティが刊行に際して、「注意深く熱心に誤りを正し」(*diligenter et accurate correcta*)、写本テキストに修正を施したことを表題において認めていること⁽²⁾。こうした要因が重なって、『水陸論』はモンチェッティが捏

造したものであろうとの見方がとられてきた。モンチェッティに対する疑惑を一層深めたのは、この修道士がダンテの同時代人エジーディオ・コロナナの著作『胎内における人体形成について』(*Tractatus de formatione humani corporis in utero*)を刊行した際にも本文を「正し、見直し、改め、敷衍した」(*correctus, revisus, renovatus et auctus*)と述べている事実であつたらう。しかしながら、コロナナの著作の場合には、モンチェッティが利用したもの以外にも写本が残存しており、比較検討の結果、モンチェッティが本文をほとんど改変していないことが判明した。「正し、見直し、改め、敷衍した」という言明に含まれた校訂者モンチェッティの虚栄心(約200年前のテキストを今日享受可能な形に整えることで学識を誇示しようとしたのであろう)を度外視するならば、この修道士はテキストに対してきわめて廉直な姿勢で臨んでいたのである。このようなモンチェッティ像を前提とする時、1508年版『水陸論』の本文に見られるいくつかの極端な誤りは、テキストに対するモンチェッティの基本姿勢に呼応する現象と見なしうる。おそらくは写本に使用されていたさまざまな略号を正確に解釈できない上に⁽³⁾、テキストの論理展開を明確に把握できなかったためであろう、モンチェッティ版『水陸論』は明らかに訂正が必要な箇所を少なからず含んでいる。そのような極端な誤りの例としては、[10]の次の一節に含まれているものを挙げることができよう。

水の円周を考察する時、もしそのいずれかの部分が陸よりも高いならば、そのことは必然的に以下の二つの仕方のうちのいずれかによってしか生じない。すなわち、第一および第五の論点で述べら

れていたように、水の中心が大地の中心から外れているか、あるいは（水と大地の中心は同一である [concentrica] が）水の円周のある部分が瘤状に隆起しておりその部分が陸地よりも高いか、のいずれかである。

驚くべきことに、モンチェッティ版では、[] の箇所に concentrica（写本では9centricaのように略記されていたものと考えられる）の反対語 ecentrica が置かれているのである。こうした誤りは、捏造されたテキストに意図的に導入されたのではなく、写本の不完全な判読・不十分な内容理解に起因すると考えた方が実状に近かる。すなわち、モンチェッティは自分が写本の中に判読しえたと信じたテキストを忠実にありのままの形で活字化したのである（数字「9」に類似した略号をモンチェッティは「e」と読んだが、そうした読みが惹きおこす論理的矛盾には頑迷に眼をつぶっていることになる）。誤りは、200年という時間的隔たりに現実味を帯びさせるために意識的に導入された不明快な箇所というよりは、頻繁に繰り返される同じタイプの初歩的ミスという様相を呈しているのである。

こうしてモンチェッティの欠点や限界が明らかになり、その反面で彼に対する信頼が回復してゆくのと軌を一にするかのように、『水陸論』とダンテの他の真作との類似点が指摘されるようになった⁽⁴⁾。しかしながら、真贋をめぐる議論にはほぼ完全に終止符をうったのは、フランチェスコ・マツォーニの功績である。その功績とはダンテが『水陸論』を著わしたことを裏づける、これまで欠如していた証言を発見したことにはかならない。そして、この証言とは、ダンテの息子のひとり、ピエトロ・アリギエーリによる『神曲』への註解第3版（1358年頃の作と推定されるが、これを伝える写本 Vat. Ottoboniano lat. 2867自体はそれより以降のもの）の中に読まれる次の一節である。

この著者ダンテはかつて土が水より高いのかあるいはその逆なのか論争した際に、土がある地点で「水より」高いとの見解をい দিয়ে議論を展開し、次のように語った。「確かなことは、球状の物体が球状の物体から突出する際には常に丸い小円状の境界線を作ることである。そのことは、丸い林檎になにか糸を付けて水から引き上げてみるならば明らかである。しかしながら、海から突出している陸地は丸い円状の境界をなしてはいない。先にも述べたように、陸は半月状の形をなして突出しているからである。それゆえ、[海から突出し

ている] 陸地は球状ではない」。四元素の本性にしたがうかぎり、土は中心にあつて全面的に水に被われていなければならないはずだと、ダンテは語っていた。しかしながら、全体的自然はただ四元素の本性のみではなく、陸上に生息する動物たちの保存を慮って、われわれの居住可能な部分として土が水から突出するように定めたのである。土は水よりも高い、換言すれば、土のある部分は天により近いのである。⁽⁵⁾

ピエトロが伝えている林檎の例による説明は確かに『水陸論』には見あたらないが、一節の中味は全体的に [18], [19] の内容に対応している。ピエトロは父の著作としての『水陸論』に直接ふれてはいないが、著作の契機となったヴェローナでの議論（『水陸論』の本文自体にも記録されている、あの議論）に言及しているように思われる。晩年のダンテの傍らで暮らしていた息子ピエトロが、ヴェローナで父が行なった討論に居合わせたか、あるいはその討論のことを父から聞いていた可能性は十分あると考えられる。ピエトロはなにゆえ註解第3版にいたってようやく『水陸論』の背景をなす議論に言及し、父の死に時間的により近い第1版（1340年頃作、約20ほどの写本が残存）、第2版（1350-55年頃作、Laurenziano Ashburnahmiano 841により伝承）⁽⁶⁾では言及しなかったのであろうか。上に見たピエトロの一節はそのような付随的疑問を惹きおこすが⁽⁷⁾、この証言の信憑性を突き崩す事実がないかぎり、『水陸論』がダンテの真作であるとする立場が大きく揺らぐことはあるまい。

『水陸論』は、その冒頭と末尾の部分が伝えているように、次のような三段階をへて成立した。

- (1) 土と水の場所と形状をめぐるマントヴァで行なわれた発端の議論（ダンテはたまたまその議論に居合わせることになったが、彼がマントヴァに滞在した理由、また議論の日時、参加者等に関する詳細は不明）。
- (2) ヴェローナの聖ヘレナ教会（今日も大聖堂に隣接して存在している）において、1320年1月20日（日）に行なわれた、ダンテによる口頭での再論および裁定。
- (3) 裁定の文書による記録保存（裁定者たるダンテ自身による文書化）

このような3段階の展開は、若干の相違点はあるもの

の、基本的に中世スコラ哲学における「討議」(quaestio)の形式に対応している。「討議」の場合には、あらかじめ議題が定められ、二者択一の形式で提示されるのが一般的であった(因みに、ピエトロ・アリギエーリの上の一節では、「土が水より高いのかあるいはその逆なのか」と定式化されている)。指定された期日の最初の集まりの際には、教師の立場に対して聴講者からさまざまな反論が出され、これに対して教師本人(あるいは得業士[baccalarius]の資格取得者が教師の代弁をした)が応答し、成りゆきよっては議論が白熱化する場合がありえた。この段階では議論にはいまだ「裁定」(determinatio)が下されておらず、支持すべき見解が決定的な形式で提示されていない。そこで後日2回目の集まりが催され、この機会に教師は反論を整理し厳密に論駁し、逆に自らの立場を根拠とともに開陳してゆき、締めくくりには再び反論にもどって不都合な点を簡略にまとめ上げた。この裁定の作業は文書化されて、教師の立場を公に表明するものとなった⁽⁸⁾。『水陸論』の構成には、第2回目の集まりの際に下された「裁定」の形式がはっきりと刻印されている。なぜなら、[2]から[7]は反論のリスト(この際に、ダンテは重要な論点のみを残したことを伝えている)、[8]から[14]は挙げられた反論に対する批判、[15]から[22]は自説の展開と養護、[23]は反論に対する回答のまとめに対応するからである。

『水陸論』が扱っている問題は、ピエトロ・アリギエーリの上で見た一節にも述べられていたように、次のように要約することが可能であろう。複合していない四元素がそれぞれの本性にしたがって固有の場所に赴くとすれば⁽⁹⁾、もっとも重い土はもっとも低い場所(宇宙の中心)に集中し、土よりも軽い水によって全面的に被われてしまうはずなのに、人間およびその他の動植物にとって居住可能な陸地(海に被われていない土地)が存在するのはなにゆえであろうか。ダンテの回答の骨子は、元素のそれぞれの本性を上回る「全体的自然」を立てることにある。神のうちにある諸々の形相を実現し神の善性を完全に伝達するためには、それらの形相に宿るべき基体として質料を付与してやらねばならない。そして、この質料は四元素の混合・複合によって形成されるが、混合は混合されるものが同時に存在しなければ生じえない。「全体的自然」は、そのため、四元素が寄り集まる部分を世界に作りだす。ダンテの回答の特徴は、海に被われない陸地が存在するという「現象を救う」と同時に、各元素の固有の本性(およびそれによって生じる同心円状に配置)という「原理を救う」側面を併せもつ折衷性であろう。

現代人ならば、大地の窪みに水が溜まっているのだという説明を行ない、四元素の本性など考慮することはなかろう(第一、現代人は諸物質を構成している元素はもっと数多くあることを知っている)。ダンテの同時代人の中にも、現代人と似た立場をとるアントーニオ・ペラカーニ・ダ・パルマ(Antonio Pelacani da Parma)のような人物がおり、1320年頃にはヴェローナで教えていたとさえ言われる⁽¹⁰⁾。だが、『水陸論』の著者はそのような立場にはまったく言及しておらず、知らなかったというよりは、むしろ意識的に無視したものと推測したくなる。その理由はおそらく、ダンテにとっては、「現象を救う」だけではなく、「原理を救う」ことが大切だったからであろう。結果として、ダンテの説明はカンパーノ・ダ・ノヴァーラやとりわけエジーディオ・コロナのものに接近することになった(本稿訳註では、しかしながら、ダンテの「出典」に関する情報はアリストテレスおよび「聖書」を除いて、すべて割愛せざるをえなかった。「出典」に関する詳細な情報が必要な場合には、冒頭に掲げた使用テキストの註釈を参照のこと)⁽¹¹⁾。

「原理を救う」意図をもっていたと考えられるダンテの立場は、今日のわれわれの視点からすれば、あまりにも「現象」を犠牲にしていると思われることであろう。ダンテが「現象」として受け容れているものは、陸地の形状(半月形)や位置(経度にして180度、緯度にして67度の範囲の北半球)などの点で、現在の地理的常識とあまりに大きくかけ離れており、そのため『水陸論』が扱っている問題自体、現代人の関心を惹くかは大いに疑問である。しかしながら、『水陸論』の明確な論理構成や頻繁に「権威」として引合いに出されるアリストテレスやアヴェロエスの著作、さらには「哲学者」、「註釈者」というこれら二人に向けられた呼び方、「権威」やスコラ哲学的術語の熟練した扱いなどは、13、14世紀の知的風土を如実に物語っており、『水陸論』の史料としての価値には疑問の余地はあるまい(訳註には、言及されているアリストテレス著作の関連部分を挙げておいた)。加えて、「哲学者の中にあってはもっともとるに足りない者」、「哲学者としてはもっともとるに足りない者」などと自らを規定して謙遜を装いながらも、「真理は我にあり」と言わんばかりの不遜なまでの自信を端々において感じさせる点、同じ自信は記録者としての他人(とりわけ嫉妬に駆られた者ら)への不信としても表わされている([2])が、羨望者らに対しては皮肉な語り口で攻撃が加えられている点([24])などは、ダンテに特徴的な個性を示すものとして興味深い。また、「聖書」からの引用を首

句反復 (anafora: “Desinant ... desinant ... Audiant ... Audiant ... Audiant ... Audiant ... Et denique audiant ...”) の技法とともに列挙して「好奇心」(curiositas)を戒め、神が定めた限界を越えて知ろうとしないように勧告する箇所 ([22]) は、そこに込められた突発的な熱のためにも、またダンテの他の作品とのテーマ的連関(たとえば、「地獄篇」第26歌で扱われている、「好奇心」のために航海で命を落とすウリクセース⁽¹²⁾や、人知を越えた神の予定の問題⁽¹³⁾など)のためにも、少なからず関心を惹くものと思われる。

先に、『水陸論』の内容がこの論考がダンテの真筆かどうか疑問を惹きおこしたと述べた。『水陸論』に示された自然科学の知識のレベルはダンテ時代のものというよりはそれ以降の時代のものだとし、そのような「時代錯誤」を根拠に『水陸論』がダンテの真作ではない(逆に言えば、ダンテよりも後世に属する者による贋作である)と考える研究者は今日ほとんどあるまい⁽¹⁴⁾。『水陸論』の内容が惹きおこす問題とは、むしろダンテの他の著作とりわけ『神曲』との間に見られる矛盾である。「地獄篇」第34歌119-26行において、地球の中心を通過して南半球に達したウェルギリウスに、ダンテは次のような台詞を与えている。

体毛をもちて吾らの梯子となりし者 [= 墮落天使ルチーフエロ]、
従前より同じ様態にて地に刺されり。
かの者、天よりこなた [= 南半球] に墜ちけり。
元来はこなたにありし陸、
彼を怖るれば、海に潜りて身を隠し、
吾らが半球に処をば移してけり。こなたに見ゆる
この陸は、かの者を避けむとて、恐らくは
上へ噴き出し、ここに洞穴をばなしけむ。⁽¹⁵⁾

この一節によれば、今日北半球に見られる陸地が元来は南半球に位置しており、ルチーフエロの墜落が大陸移動と煉獄山の創出という大変化を惹きおこした。したがって、「地獄篇」の説明では、大地が北半球にある原因も結局のところ、この墮落天使に帰されることとなる。これに対して、『水陸論』では、ルチーフエロや大陸移動、南半球に存在する煉獄山のことはまったく言及されておらず、北半球における陸地の隆起は恒星天の作用によるものとされている([20], [21]参照)。「地獄篇」の説明が宗教的な世界観に依拠した超自然的・形而上学的性質のものであるのに対して、『水陸論』の説明は自然の範囲内で行なわれた物理的

性質のものとなっているわけである([20]で著者は「ここでの考察は自然の質料を越え出ない」[...tractatus presens est infra materiam naturalem]と述べ、『水陸論』における立場を明確化している)。これら二つの説明は調停しがたく矛盾しているとし、『水陸論』をダンテの真筆ではないとする、ナルディ⁽¹⁶⁾のような有力な研究者もあったが、二つの説明はほんとうにそのように激しく対立しているのであろうか。パドアンは、ダンテが「地獄篇」で示した見解を捨てたのであれば、『水陸論』の[21]で発せられる「東西180度の土の隆起はなにゆえ現部分に生じ、他の部分には生じなかったのであろうか」という質問は、ダンテにとって新たな見解を披露する恰好の機会となったはずだと推測する。しかし、ダンテは前言を取消すのではなく、「これに類した質問は、人知のおよばない事柄であるから、はなはだしい愚劣さないしは高慢さによって提示されるのだ」と述べることによって、問題を掘り下げたことを拒否し回答を与えていない。いやむしろ、土の隆起の場所としては「現部分が最良だと神がお決めになったのである」とすることによって、ダンテは物理的な説明の限界を示し、逆に啓示による超自然的な説明の必要性を示唆しているのであろう。ダンテは慎重に沈黙することによって「地獄篇」の見解を保持・擁護しているのだ、とパドアンは考える⁽¹⁷⁾。これに対して、時の推移とともにダンテの見解が変化していった、という立場をマッツォーニはとる。ルチーフエロの墜落によって惹きおこされた「地」(terra)の混乱に関する記述が、「聖書」には散見される(『イザヤ書』第14章9-16、『黙示録』第12章7-12、同第20章1-3)。この「地」という単語が、文字どおり四元素のひとつとしての「土」を意味すると解釈するのか、あらゆる形相を欠いた原質料が比喩的に「地」と呼ばれていると解釈するか、という観点からすると、ダンテの立場は『神曲』の中自体においても一貫していない。「地獄篇」第34歌からの上の一節では、墮落天使が混乱させたのは四元素のひとつとしての「土」であるように述べられている。これは「聖書」の出典が字義どおりに解釈されたことを意味すると同時に、ルチーフエロの墜落によって生じた地獄は四元素により構成されているため時がくれば解体し永遠には持続しないことを含意しているのであろう。しかしながら、「地獄篇」第3歌7-8(「永遠ならむものを除きて、われより先に創られしものなかりけり。そして吾、永劫に続かむ」⁽¹⁸⁾)では、地獄の成立以前に存在したのは神が直接創造した「永遠に存続するもの」([cose] eterne)だけだったとされている。「天国篇」第7歌123-38や

同29歌21-36の記述に照らしてみるならば、この「永遠に存続するもの」とは（1）質料を一切欠いた純粹な形相としての天使（宇宙の最上部を占める）、（2）形相をまったく欠いた原質料としての「地」（宇宙の最下部を占める）、（3）質料と形相を不可分の結合させた（決して解体することのない）天体（宇宙の中間部を占める）、の三者である。地獄が「永劫に続く」とすれば、それが原質料としての「地」によってできているからであろう。実際、「天国篇」第29歌49以下の記述では、墮落天使が混乱させたのは「汝らの元素の基体」⁽¹⁹⁾と書かれており、原質料としての（すなわち比喩的名称としての）「土」であると解釈できる。このような状況を前にしてマツォーニは、「地」に関してダンテが次第に比喩的解釈の方に傾いていったと考える⁽²⁰⁾。「天国篇」第29歌の執筆時と『水陸論』の「裁定」が行なわれた1320年の時間的近さを考慮すれば、マツォーニの立場は合理的であろう。

筆者・訳者としては、この問題に臨む際に前提とされるダンテ像に注目しておきたい。ナルディには、終始首尾一貫した矛盾のない思想家・哲学者ダンテを描きだそうとする傾向があるように思われる。そして、度合は遙かに小さいとはいえ、同じ傾向はパドアンにも見られると言ってよからう。これに対して、しばしば見解を翻すダンテを受け容れ⁽²¹⁾、思索の継続と深化による変化を考慮したマツォーニのダンテ像の方が実状に近く、また共感に値するように思われる。だが、「成長・発展」という（ある意味で常識的な）図式を含んだこのダンテ像にも、筆者・訳者は全面的に賛同するわけではない。すでに別の機会にも論じたように、首尾一貫することに気を使わないダンテ、矛盾を意に介さないダンテというものがあっていいのではなかろうか⁽²²⁾。時ごとに直面している問題に対してダンテは自分の見解を述べてゆくが、その場合、自分の立場を支持してくれる「権威」・「出典」を提示できるか、あるいは自分に対立する「権威」・「出典」がある場合には、それらとの巧みな調停がやりくりできればそれで十分である。議論は「権威」・「出典」を引用

し組み合わせる一種の知的ゲームであり、これに臨むダンテの基本姿勢は修辭的なものだったと考えれば十分なではなかろうか。コンティーニがダンテを「テーゼというよりはテーマの人」と規定する時にも同じダンテ像が描かれているように思われるが⁽²³⁾、そのようなダンテ像を前提とすることが妥当かどうか、判定は『水陸論』のこの翻訳およびダンテの『神曲』をはじめその他著作を繙かれる読者に委ねることとしよう。

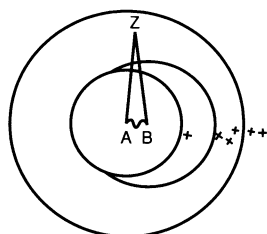
水陸論（二元素、すなわち水および土の形状と場所について）

本稿を読まれる各々の方すべてに安寧がありますように、哲学者の中にあってはもっともとるに足りない者、フィレンツェ出身のダンテ・アリギエーリが、真理の起源であり光明であられる神にかけて祈ります。

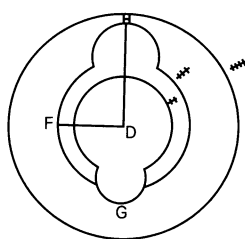
[1] 読者諸氏には次のことをお知りおきいただきたい。筆者がマントヴァに滞在した折のこと、ある議論が生じ、度々激しく論争が繰り返された。しかし、真実というよりもむしろ外見にしたがって争われたのであって、問題は未解決のままに終わった。筆者は幼少の頃より常に真理愛に育まれてきたので、上に述べた問題を論じないままにしておくことができなかつた。そして、その件に関する真理を明らかにし、反論に答えようと考えたが、それは筆者が真理を愛し、また誤謬を嫌うからにほかならない。羨望の対象となる者がいなくなると、[不在となったその人物に関して] 決まって嘘を作りだす者が多い。そのような嘘つきが嫉妬に駆られて適切な述べられた言葉を歪めてしまわないよう、筆者自らの手で書き込まれたこの紙片の上に、筆者が解決した問題を書き残し、議論の全容を筆にしたためておこうと考えた次第である。

[2] さて、議論は二元素、すなわち水と土が占める場所と外形（あるいは形状）をめぐるものであった。筆者がここで「形状」と呼んだのは、哲学者 [=アリ

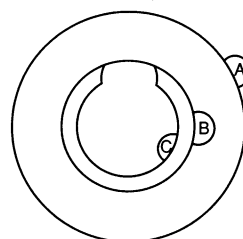
[図 1]



[図 2]



[図 3]



ストテレス]が『^{カテゴリー}範疇論』で四番目の種類の質として
いるものことである⁽²⁴⁾。議論は次の問題に限定さ
れたが、それが探求すべき真理の基礎だったからである。
そこで、「水はその円周（すなわち本来的な境界）
のいずれかの部分において、海に被われていない陸地
（一般に「居住可能な四分の一部分」と呼ばれている）
よりも高いかどうか」に、問題を限定してさまざまな
観点から議論が行なわれた。そのうち重要でないもの
を省略し、いくぶんかの効力を有すると思われる五つ
の論点だけをここに残す。

[3] 第一の論点。二つの円周が互いに不均等に隔
たっている時には、二つの円の中心は同一でありえない。
しかるに水の円周と土の円周は不均等に隔たっている。
ゆえに、云々。これに加えて、次のような考察
が展開された。すべての者が認めているように、土の
中心は宇宙の中心に等しい。ところが、宇宙の中心以外
の場所を占めているものはすべて、中心より高いと
ころに位置している。さて、円周はあらゆる部分にお
いてひとつの中心から生みだされるものであるがゆえ
に、水の円周が陸の円周より高いことは結論づけられ
る。主たる推論の大前提は幾何学において証明されて
いるところにしたがって明白である。他方、小前提は
感覚を通じて明白である。水の円周によって、土の円
周のある部分は被われているが、ある部分が被われて
いないことを人は眼で見て知っているからである。

[4] 第二の論点。より高貴な物質にはより高貴な
場所が与えられねばならない。しかるに、水は土より
高貴な物質である。ゆえに、水にはより高貴な場所が
与えられねばならない。さて、場所は上部にあって原
動天（すべてを包摂している、もっとも高貴な天）に
近づけば近づくほど高貴であるから、水の場所は土の
場所より高いこととなる。したがって、水は土より高い
（場所の位置とその場所に置かれたものの位置に違い
はないからである）。この場合、主たる推論の大前提・
小前提にはともに、あたかも自明であるかのように、
証明されなかった。

[5] 第三の論点。感覚の与件と一致しない考えは
すべて謬見である。しかるに、水が土より[場所的に]
高くないと考えることは感覚の与件と一致しない。ゆ
えに、この考えは謬見である。推論の最初の部分（大
前提）は『^{デアエネ}靈魂論』第三巻への註釈者 [=アヴェロエ
ス]の解説により明らかであると、主張された⁽²⁵⁾。
後続の部分（小前提）は水夫らの経験に照らして明ら

かである。水夫らは海にある時には山が自分の下に見
えると述べ、その証拠にマストに登ると山が見えるが、
甲板にいたのでは見えないと言う。こうしたことが生
じるのは、陸が海面よりもかなり低く、陥没してい
るからだと思われる。

[6] 第四としては次のように論じられた。仮にも
し土が水より低くなかったならば、土にはまったく水
がなくなってしまうであろう（少なくとも、いま問題
となっている海に被われていない陸地に関しては、そ
うした事態が生じよう）。かくして、泉や河川、湖は
存在しなくなってしまうであろう。しかし人が眼にし
ているのは、これとは反対の事態である。したがって、
この議論の前提を裏返したものが真実である。すなわ
ち水は土より高いのである。この帰結は、水が本性的
に低いところに流れてゆく事実によって証明された。
哲学者の『^{メテオ}氣象学』を通じて明らかのように、すべて
の水の源泉は海であるから⁽²⁶⁾、もし海が陸より高く
なかったならば、水が陸に向かって流れることはない
であろう。水の本性的な動き全般に関して、開始地点
はより高くなければならないからである。

[7] さらに第五として次のように論じられた。潮
の干満によって明らかのように、水は月の動きに大き
く依存している。月の軌道の中心は大地の中心から外
れているので、水の境界が月の軌道の離心性を模倣し、
結果として、大地の中心とは異なる点に中心をもつと
しても合理的だと思われる。そしてこのことは、第一
の論点において示されたように、水が土よりも高くな
ければ生じない。ゆえに、先と同じ結論が導かれる。

[8] その他の論点は無視するが、海に被われない
居住可能なこの陸よりも海の方が高いと見なす者らは、
上のごとき議論によって自説の正しさを示そうとした。
だが、彼らの主張は感覚の与件にも道理にも反してい
る。感覚の与件に反するのは、全陸地において河川が、
東西南北いずれの海であれ、ともかく海に向かって下
ってゆくのを人が見ているからである。こうしたこと
は、河川の始まりの地点および河床が海の表面より高
くなければ生じえない。道理に反していることは以下
に明らかにされるが、さまざまな観点から証明されよ
う。

[9] 先にも述べたように、二元素の位置および形
状を解明し、この問題に決着を付けたいが、論述は次
の順序をたどることになろう。最初に、(ア)水の円

